珍笑 •妙笑 山椒魚亭主の夏休み'99

長崎政直

9月9日　ポルトガルへ •東ティモール問題

午前６時：ＴＶがスウィチ・オンになって、大き目の音量に、こんな時間からＴＶを見るなよと不機嫌な目覚め。何か良い夢を見ていたようで、起きるのが惜しいというような心持ち、なかなか体が起きない。隣に寝ているギャルソン・ウィ・山崎をうかがう。熊のような高鼾。ＴＶが、このホテルのモーニング・コール。暗闇の中でスウィッチ・オフ。洗顔後、あらかじめ昨夜のうちに整えておいたバッゲジを閉じる。なにか気の利いたメッセージをと思うのだが、思いつかない。

ボン・ジュール！ムッシューｅｔマダム。お世話になりました。ありがとう。

諏訪方面にお出かけの折りにはお立ち寄りください。月曜日は定休日です。

西岡さんへ：メルシー・ボークー!!心より。

政直

７時：Time has come.同室のギャルソン・ウィ・山崎に、「どうやって行くのですか、大丈夫ですか、ポルトガル語できるんですか」と聞かれたとき、「何とかなるだろう。おじさんだって行けるのだから、BOYS BE AMBITIOUS てなところを見せなければね」と笑って言ったけれど、一人で、行ったことのない、言葉も知らないポルトガルへ出発するというのは、かなり不安なことなのだ。「サア･･･行くぞ」と自らをはげまし、昨日までの旅の友達への未練を捨てて、部屋を出る。ホテルのチェックアウトから勝負なのだ。

ギャルソン・ウィ・山崎は関東辺りの酒屋の二十歳半ばの息子で、のんびりした性格と、人に何か頼まれると、「ハイ！！」と答えて、たとえ夜中でもバーガーを買いに出るという素直な性格を持つ、好青年で、白痴のムイシュキン侯爵のような無垢の人、キリストに近い人柄なので、ウィ（Oui：Yes）とあだ名した。

「ボン・ジュール。Check out, Please.」「What is your name? KITADA?」「No」「NAGASAKI?」「Yes.」「ＯＫ．ボン・ボヤージュ。」「シャルル・ド・ゴール空港へタクシーで行きたい。タクシーを呼んでくれませんか。」「ドアを出て、右に行ってください。そこにいます。」「ありがとう。」ひとり旅の第一歩目はまず大成功。

「ボン・ジュール、ムッシュー。エア・ポート：シャルル・ド・ゴール。Ｆ２ゲイト、プリーズ」「ウィ、ムッシュー。」バゲッジがタクシーのトランクにつみ込まれ、運転手が乗り込む。フランス語で何か聞かれまるで解らないが、どこから来たのかと聞かれたのかと「ジャポン」と答える。「東京へ帰るのか？日航か？」「いいや、ポルトガルへ行くのです。エール・フランスで」「そうか、それならＦ２でよい。」彼はＦ２ゲートでは東京に帰れないから、間違っているのではないかと気を使ってくれたのだ。かれはニヤリとして、車を走らせる。早朝のパリ市内は車も少なく、素早く抜け出すことが出来、空港への道では、多少の渋滞はあったが、今までは、もっとも速く、空港に着くことが出来た。230 ﾌﾗﾝ。ご丁寧に領収書までくれた。

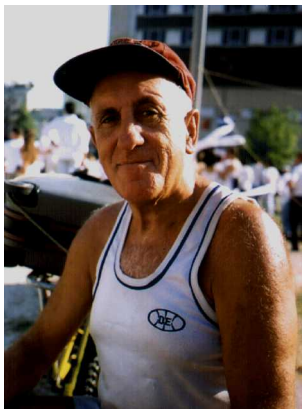
金属探知機を通過後、ストックが切れかかったタバコの補充と寝酒、シャルトリューズ・イヴを買う。先にレジに並んだ二人組みのアラブ人が話し掛けてくる。「何処からきた」「日本」「良い国だ」「行ったことがあるの？」「ない、でも良い国だ」「･････ありがとう」彼らはかなり酔っ払っていて、免税店のレジの女性が笑っている。一緒にモロッコに行こうなんて誘われそうで、チケットの変更やらリスボア行きを変えることなど簡単ではないのだが、気持ちは何が何でもポルトガル、リスボアというのではなく、たまたま「深夜特急」（沢木耕太郎著）でユーラシアの西端・ザグレスのフレーズにちょっと惹かれただけの計画なのだ。それでいて今度のポルトガルでは、日程上サグレスには行かない。これ以上このアラブ人にかかわるとややこしくなるぞと感じる。しかし、彼らは私の物思いを察するはずも無く、支払を済ませると千鳥足でバイバイとか言いながら行ってしまった.

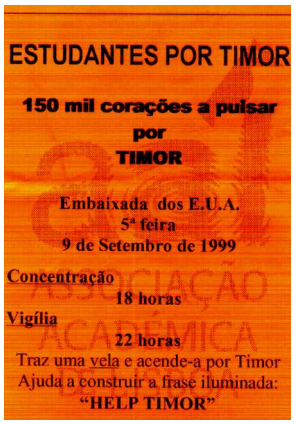
搭乗手続きが早かったためか、受付のマドマゼル、しばらく考えた末、最後部席をくれた。飛行機への乗り込みも最初の方だったから持ちこみ荷物の処理、身の始末も空間的に時間的にも、そして既に乗り込んで着座している人に、パルドン、パルドンなんて気を使わなくてもよいし精神的にも余裕を持って出来る。結局、私の横二席には誰も座らず、大いに満足。

上空、薄い雲の下、パリはボーっとしていた。1 時間もすると鉛色の大西洋、更に 1 時間、陸地が見え、フランスと違って山が多く、縫うように道が走り、人家が道に沿って並んでいる。１２時を過ぎて、夏のリスボア着。空港の銀行で 5 万円両替する。54500 ｴｽｸｰﾄﾞになる。大きな額面の紙幣しかくれなかったので、タクシー代金を用意するために煙草を買って小額紙幣にかえる。タクシー乗り場には長い列。30 分ほど待って、ホテル・デノアのパンフレットコピーを渡し、30 分ほど乗って到着。「ハウ･マッチ」「ｽﾘｰｻｳｻﾞﾝ･･･!!」旅本に示されたタクシー代金より一寸高いなと思うが、勝手や仕組みがわからないので、3000 ｴｽｸｰﾄﾞを渡す。運転手はためらうことなく受け取った。ホテルのレセプションで、名前を告げて、ホテルバウチャー（予約券）を渡す。マネージャー氏、バウチャーと予約帖を見比べて、「申し訳ないが、手違いがあって、オーヴァーブッキングになってしまった。今夜は泊まれない。」「なに!!･･･エー･･･!!!!!」「隣のホテルに頼んであるから今夜はあちらに泊まってくれ」予期せぬ出来事に「････ﾑﾑﾑ!!ｵｰﾗｲ!!ｲｪｽ!!　ok!!」。マネイジャー私のバゲッジを引きずって、となりのホテルのレセプションへ。デノアに比べると☆一つ少なそうな☆☆級。パスポートを見せてというので出すと取られてしまった。明日チェックアウトまで預かっておくと言う。あまりないケースなので戸惑うが、郷に従う。ホテル・デノアのマネイジャー、それではと帰ろうとするので、呼び止めて、「明日は何時に移れば良いのだ」と聞くと「11 時以降何時でも」とのこと。マネージャー助手が鍵をくれ、エレヴェーターまで案内し、にっこり笑って、ごゆっくりとかなんとか声をかけて、おしまい。部屋のあるフロアーで、部屋を探してうろうろしていると、おばはんが出てきて、こっちこっちと案内してくれたのだが、まだ部屋が出来ていない。「ちょっと待っててね」「････」もう一人のおばさんを呼んで、大急ぎのメイク・ベッド。どちらを使うか聞きもしない、ツインのベッドの片方しかつくらない。手抜きだ。それでも、「部屋の鍵はカード式の鍵で、室内に入ったら所定の装置にそのカードを差し込ま

ないと電気が使えない」と教えてくれた。おばさんに今何時と時計を示して聞くと、お互いの時計を見比べ、彼女のと私のでは 1 時間の誤差があるのに、それでよいと身振りでしめし、チップを受け取り、オブリガートと挨拶して出て行ってしまった。ともあれ、一人で、なんとかポルトガル、リスボアに、ポルトガル語のワンフレーズも持たずに着けたのである。

早く切り上げたとはいえ昨夜は遅くまでのお酒盛り、早朝の起床は眠気を誘った。しかし、一人きりという気持ちの高ぶりは 2 時間ほどの仮眠しかさせなかった。それに日本での休日の朝、ベッドに横たわってうだうだしている、その再現は惜しいような、もったいないような気分とリスボアまで来てしていることかという脅迫観念に囚われて、街に出ることにする。レセプションの横のバーに座って、ビール・サグレスを飲みながら「旅本」と現地地図を見比べ、多少の土地勘をつけた後、街に出た。一杯のビールが効いてか、石畳の歩道をうまく歩くことができない。もう歳なんだ、これが最後の旅かなどと情けない思いに駆られながら、1 時間ほど歩く。これ以上ホテルから離れると帰り道に迷いそうと思われた辺りから引き返した。街角に 80 人くらいの人だかり。地面には、ろうそくが何本も灯され、さまざまなメッセージが書かれた紙や、暗い、陰惨な、殴り描きに近い絵の横断幕が立てられていた。一人の青年が突然、道を隔てたシェラトンの高層ビルに向かって指にＶ字を作り、振り上げて、叫び始める。「パズ・エム・チモール・・・・・」「パズ･パラ・チモール・・・・・」。もう一人の青年が加わり、やがて 50 人くらいにそのシュプレヒコールは膨らんで、大合唱。老若男女さまざまな人が叫ぶ。ラジオ放送局の取材だろうか、男が、携帯無線のマイクに状況説明やら解説している様子。一頻りのシュプレヒコールの後、最初に





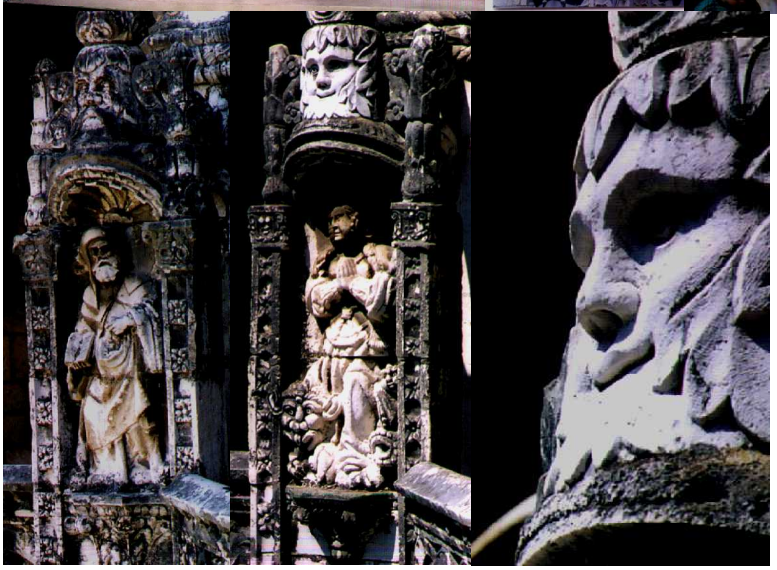
叫びをあげた青年に向かって、みんな拍手、拍手。この辺りを通過するアンテナに 1 メートルくらいの白い布をなびかせている車が、次々と激しくクラクションを鳴らす。停まっている車も呼応して激しく鳴らす。拍手拍手。暴動でも起こりそうな勢い。最初は、おどおどと、それでも好奇心で周りをうろうろしながら写真を撮っていたけれど、疲れて、その人の塊から少し離れ、縁石に腰掛けて様子を見ていると、ピカソに似たおじさんが自転車でやってきて、横に座り、自転車から水筒をはずすと自分の脚にかけ冷やした後、私に話し掛けてきた。ﾎﾟﾙﾄｹﾞｽは解らないと言うのだが、身振り手振りで話し掛けてくる。日本人だと言うと、日本は良い国だと言います。人の塊をさしてこれはなにと聞くと、赤いＢ５半 4 分の１の「PAZ EM TIMOR」「 PAZ PARA TIMOR」と書かれた紙をくれ、「チモール･･･チモール････チモール、ブラジル、マカオ、アンゴラ･･･」と繰り返す。どうも旧ポルトガル領のチモールで何か悲しいことができたらしい。東チモールの悲劇をその時、私はまだ知らない。ピカソ叔父さんの話は、彼の生業に移る。この辺りの飲み屋さんでピアノを弾いているのだそうだ。写真を撮って良いかと聞くと、笑って、口をつぐんでカメラに向かう。撮り終えると、歯を見せて、抜けているのはサーフィンをしていて、ひっくり返った拍子にボードに当って折れてしまったのだと話す。6 時を回ると、集会の人だかりは更に増して行く。上半身裸の若い兄ちゃんが二人、白鉢巻をして、肩を怒らせて集会の輪に入っていく。時々、シェラトンに向かってシュプレヒコール。車のクラクションの嵐。拍手!拍手！拍手！。さすがに私のところには来なかったが若い娘達が署名集めもしている。しかしことの成り行きは、これ以上の変化もなさそうで、1 時間もいると飽きてきて、ホテルに帰ることに決め、おじさんにさよならを言うと、おじさんも帰ると言い立ち上って、横倒しにしてあった自転車起こし、私とは反対の方角へ消えた。叔父さんがピアノを弾いている店の名を聞かなかった。もっと仲良しになれたかもしれないのにと残念に思う。

ホテルに帰りついて、まずバーによる。街角の集会について、ピカソおじさんからもらった紙を示しながら尋ねる。PAZ EM TIMOR は PEACE IN TYMOR であり、PAZ PARA TIMOR は PEACE TO TIMOR なのだそうだ。今、ポルトガル中が、かつての植民地チモールでのインドネシアの大殺戮に怒り、夢中なのだと言う。シュプレヒコールの向けられたシェラトンには、国際機関の何かがあって、抗議の格好の標的なのだそうである。

東ティモール危機：ジャカルタから東の１５００ km、ティモール島の東半分。人口約８０万人。面積 15,000 平方キロメーター。３０を越す言語集団がある多民族集団。大航海時代の１５１５年、ポルトガル人が始めて姿を見せた。１６５７年オランダ人がやってくる。現地の諸民族を巻き込んで両国の領有争いが延々と続いた。１９１６年東西に分けられ、領有争いに決着。１９４５年インドネシア独立に伴い、西ティモールはインドネシアの一部になる。１９７４年、ポルトガルで無血クーデター、ポルトガル国内では独裁政治が終わり、海外領土の非植民地化宣言。ここで完全独立派とインドネシア併合派の内戦が起こる。インドネシアが正規軍を派遣、１９７６年併合。国連ではこの併合を認めなかったが、冷戦中で、「もう一つのキュ

ーバ」になる危険があって、米国を初め西側諸国は黙認。独立派はポルトガルのクーデター勢力の影響を受けて、左翼的な傾向が強い。黙認は冷戦の終結と共に解かれる。東ティモールはイスラム教徒９０％のインドネシアに対し、大半がカソリック、文明の接点であり衝突する場でもある。西欧キリスト教社会の思い入れが重なる。ポルトガルの東ティモール独立支援は植民地時代、そして性急な撤退の混乱への贖罪。一方のインドネシアにしてみれば、現在、東ティモールの帰趨はそれほど重要なことでない。スハルト時代、統治の手兵：プレマンのなれの果ての残留派民兵が、暴走、独立運動派へ非人道的殺戮をしている。（AERA 99.9.27.より）

このチモール救済の市民運動に遭遇したこと、その抗議がいかなるものか理解できたことで、今日の一日が無駄な時の流れではなかったと思われ、取りあえず今日の終わりにビール・サグレスで乾杯。バーテンのお兄さん、さっきは出してくれなかったミックスドナッツをたっぷりくれ、ゆっくり時間をかけて一杯のビールを飲み終えたが、飲み足りない。ジントニックを更に注文。また、たっぷりのナッツ。飛行機の中の昼食だけだったから、おなかもすいていてたっぷりのナッツがうれしい。レストランは何処と聞くと 2 階で 7 時からだと言う。後 30 分粘ればって夕飯だ。時間調整を思い出して、今何時だと聞くと 5 時半だという。私の時計は６時半、1 時間の誤差。粘りきれないとあきらめて部屋に帰る。たっぷりナッツで膨れた胃袋と、２杯のアルコール、少しポルトガルになじんだことによる安心感はそのまま翌朝までのたっぷりの熟睡となってしまった。



9月１０日

リスボア

：ベレム＆

バイジャ

９時目覚め。ぐっすり寝た観じ。ジュース、パンとｺｰﾋｰ、ヨーグルト、ハムで朝食。１１時を待って、チェックアウト。ホテル・デ・ノアに移動。こちらの方が新しく、広い部屋。やっとバゲッジを全面開放。せんだく物を、ランドリー袋にいれて出す。

旅本を出して、さてどこに行こうか、今日の計画を練る。世界遺産のフレーズが目に留まる。リスボア中心からは、かなり離れた、Belem ベレムの Mosteiro dos Jeronimos ジェロニモス修道院。入り口正門の石の彫刻がすばらしさを越えて、凄い。修道院の教会部分は無料。その奥の博物館は有料。キリストにまつわる宗教画が大半。

建物に付随した石像、タピストリー等々、一時間ほど見学後修道院を出る。

旅本の地図上ではかなり離れた処かと思われた Padrao dos Descobriments(発見のモニュメント）を、Rio Tejo(:テージョ川)側に発見。インペリア広場を横切り、地下通路で電車路線をくぐり抜け、モニュメントに到着。400ml 大のポリコップになみなみのサグレスとサラミ・ソーセージの薄切りをはさんだサンドウィッチを買い求る。店の親父さんが「ブツブツ!!」「ハウ・マッチ？」横から娘が「１１００円(ｴｽｸｰﾄﾞ)」。若い人達は良く英語が分かる。

石のベンチに腰掛けて、観光バスで旅する年寄りが多いアメリカ人を眺めながら昼食。やがて日本人グループのご到着。混じって、説明を聞く。ブラジルがポルトガル領で、ペルーがスペイン領であった理由、東経６０度あたりの経度で談合したんだって。パスコ・ダ・ガマはポルトガルの英雄なのだが、もう一人のポルトガル人であるマゼラン、スペイン王の援助で新大陸の発見の航海に出たので、ブラジルを越え、東経６０度を越え、南下した結果がマゼラン海峡の発見の秘話なのです。このご一行様、次にベレムの塔へ向かうだろうと考え、一足先に行って、また盗み聞きできると１キロくらい離れた塔に歩いて向かう。もう１００メートルというあたりで、ご一行様のバスに抜かれ、丁度良いタイミング、してやったりと得意な気持ちで着いてみれば、影もなく、がっかり。司馬遼太郎は「ヨーロッパの貴婦人が座った感じの美しい塔だ」と評したそうであるが、そんな感慨は湧かない。何時に、どの方向から見るかによって感慨は変わるものだ。オレンジ色の朝日のあたる頃、深紅に燃えながら沈み行く夕日の頃ならば、さもありなん。ベレムには３時間ほどいたろうか、帰りのタクシーを探すが見つからない。

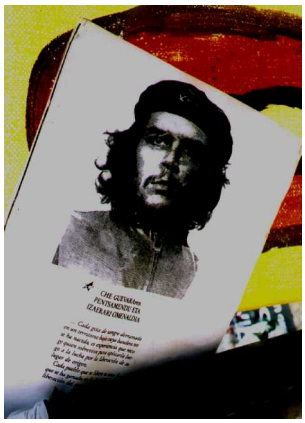
ジェロニモス修道院に戻って、キャッチ。ロシオ駅を指示すると電車もバスもタクシーも同じ道を猛スピードで追いつ、追われつ、１５分もかからず、ロシオ駅そばの国立劇場前で降ろされる。当たり前のことだが、方向感覚が、地図と合わないので、しばらくぶらつき、自分の現在地を確認、これさえ終われば、後はどうにでもなる。リスボアーの繁華街、Baixa バイジャの Rua Augusta アウグスタ通り、常に歩行者天国で、花屋さん、絵や革製品を売る露天商、通りの中央には、パラソルがいくつも張られ椅子とテーブル、道端のお店で、軽食や飲み物を買い、ここで憩うリスボア市民、旅人。こんにちはと声をかけられ、見れば、可愛いお嬢さん二人。「旅本もっていたから、声をかけました」昨日からの長い沈黙がやぶられ予期せぬなつかしき日本語に、「ありがとう」「そこのお店で１５０エスクードでビールが買えます」またまたありがたいお導き。早速、ビールを買い求める。ギャルソンがポルトゲスで「店の中か、外か？」「???ビール!!!ポルトゲスは分からない」マドマゼルが「in this shop or outoside ?」「アウト・

サイド」「ok!!!」どうも中と外で値段が違うらしい。外と言ったのに２５０エスクード。二人のお嬢さん、埼玉の大学２年生。我が愛する息子と同じ世代。一人はアルバイトで資金を貯め、今一人は親がかりだたという。アルバイトでは自立のはじまり。親がかりは自立はもうちょっと先ということか。夏休みの終わりをドイツ・（オランダ・フランスを跳ばして）ポルトガル・スペインの旅。ユースホテルを泊まり歩いているとのこと。集団ではなくて、日本の外へ出てみる、自立、もうちょっと先に自立に関わりなく、この勇気がとても素晴らしいと思う。私の旅の経過や目的などを、年齢差を忘れて、しばらく話すと、ワインについて、おいしいワインについて教えて欲しいと言う。フランスワインとドイツワインの特徴、格付けについて講義。美味しいワインについては、日本に帰ってからと約束して、住所、電話番号、名前を、彼女らのメモ帳に記入し、二人の写真を撮って、連絡くれたら送るからと約束し、別れた。彼女たちはロカ岬を回り、南に下り、それからスペインに渡って帰るとのこと、ﾎﾞﾝﾎﾞﾔｰｼﾞｭ。

アウグスタ通りに、物乞いや絵描きが絵を売っていたり、大道芸人が芸をしたり、パリのモンマルトルの丘ほどではないが、楽しめる。サンタ・ジュスタ通りとの交差する路地の石畳の上を、リズムに合わせ、ゴロゴロ転がり回る、一世風靡的集団大道芸を見つける。カメラを向けると、棒を回転させ振り上げては、巧みに（??時々失敗して落とす）とる、バトンガールがやっているあれ、を芸している青年が撮ってはいけないと手でレンズを覆う。「パルドン・ミー」（混乱していてフランス語と英語とごちゃ混ぜなのです。）カメラを下げると彼は、片腕のない、金集めの青年を呼び、その帽子の中に金を入れろと言う。ポケットのコインを浚って、手のひらに広げ、中から 200 ｴｽｸｰﾄﾞほどを入れたが、少ない、もっているコイン全部を入れろと更に言う。2000 ｴｽｸｰﾄﾞほどはあったから、惜しくなって、写真を撮るのを諦め、立ち去ろうとすると、追っかけてきて、「寄こせ、入れろ」とポルトガル語で言い募る。早々に、ほうほうの躰で、その場を逃れた。「ケチ・ケチ!!アホ!!アホ･･･!!」罵声が浴びせられたが、振り返らない。写真のネタはいくらでもある。

路上の店で、これにワインを入れてセールスに出ようとか思いながらワイン３本が入りそうな皮の肩掛けバッグを買い、２年前スコットランドで買ったカシミアのセーターが、２シーズンの冬の間着続けたら、穴も開き、ほころびも出てきたし、買い換え時だと思っていたので、ポルトガルの漁師が着ているというセーターを買い、ポルトガル語＝英語のポケット辞書、旅本お勧めの CD ショップで、ファドのＣＤ、マリア・ロドリゲス２枚とダイジェスト盤１枚購入、一気のお買い物。６時を回っても陽は落ちないが、バイジャの町での３時間余、いささか疲れ気味ではあるが、歩いてホテルまで帰ってみようと無理な企てをする。半道も行かない内に、くたびれきって、道端のベンチで休んで、たばこを２本。隣のベンチでは若い男が女の膝枕で愛の語らい。再び歩き始めるが、凸凹石畳の舗道に、時々足を取られて歩幅が乱れ、やれ、

歳をとったな素直にまた思う。リスボアの街はいくつもの丘があり、丘を登るようにしてホテルに向かうのであるから２キロの道のりは４キロ以上に感じられる。パリや香港やロンドン、エジンバラの街を彷徨うのと勝手が違う。シェラトンの前の広場には、昨日と同じ PAZ EM TIMOR の人だかり。TV も取材に来ている。抗議のプラカード、垂れ幕、ポスターも増えている。ここに限らず、リスボアの街角、広場にある建国の英雄達の石像の多くが黒いビニールで覆われている。無粋なことと思ったりしたのだが、どうも、PAZ EM TIMOR と無関係ではないらしい。ティモールに関し国家が何も出来ないでいることへのアイロニーを込めて、この建国の英雄の像が恥ずかしがって、身を晒すことを拒否しているのだと誰かが表現したのだろう。建物のテラスから、窓から、白い布が垂れ下げられ、なかには、応急に、プリンターの連続用紙で間に合わせているものもあった。オートバイが十数台、塊になって、クラクションを鳴らしながら走り去る。全ての抗議者が深刻なのではない。はにかむように笑って運転する者もいる。抗議姿勢を積極的に見せていない人々も、この抗議行動を支持しているように見え、全市民的、全国民的な抗議と思えた。台湾でも、沖縄でもよいのであるが、これほどの共生感を、私は持っているだろうか。また、建国のモニュメントを覆うという行為は、それらが、外来の観光客のためにあるのではなく、ここに暮らし、生きていることの象徴としてのモニュメントと彼らには考えられている証だろう。上野の西郷さんの銅像が覆いをかけられるということなのだ。あるいは、今では少なくなってきているが、古老と呼ばれる人々が、喜びの時、悲しみの時、村の鎮守にお参りに行き報告したりお願いしたりする、ああした日常の精神性がこのモニュメントに対してリスボアの人々の心の中にあることの証なのだろう。



過激な抗議行動が起こる様子もなく、掲げられたチェ・ゲバラのポスターが、不釣り合いに感じられる。今日は通り抜け。近道をと、地図を頼りにショートカットするが、結局、道に迷って、高校生くらいの女学生の数人の塊に、地図を見せながら、「オンデ・ヒヤー here（何処）？オンデ・アヴェニュー・デューク・ダリヴァ？？」と英語混じりで聞く。「ディス・ストリート！」とみんなで教えてくれる。「オブリガート」とお礼を言えば、「ありがとー・ありがとー」と私の背中を日本語で笑い驚かせる。世界は狭く、他人種を恐れないフレンドリーな国際性は日本の子供よりは先を行っているなと少し深刻な気分にもなるが、ホテルへの道が判ったことの安心は、たちまちそんな気分を雲散霧消させる。

ホテルで夕食をと、レストランの場所を聞くと、このホテルにはないと言う。ホテルの周りには、それらしいものはなく、前泊の隣のホテルのレストランに出かける。注文の前に「部屋番号は？」「ここには泊まっていない。外から来た。」「現金で払うか？」「Yes!!」。注文はコンソメ・スープ、鱈のグリルしたもの、白ワイン。腹もできて、いざ夜のリスボア、Lisboa a Noite(ﾘｽﾎﾞｱ･ｱ･ﾉｲﾃ)へファドを聞きに出かける。

「Senhor! Pleasa call taxi!!」「OK! Wait there few minites,please ! Taxi soon come.」「OK! Thank you. Obrigato!」タクシーの運転手に行き先を書いたメモを見せる。"Bairro Alto(ﾊﾞｲﾛ･ｱﾙﾄ)Lisboa a

Noite"。これで、その辺りまでは行ける。Igleja de Sao Roque (ｲｸﾞﾚｼﾞｬ･ｻﾝ･ﾛｯｹ教会)の横で降ろされる。地図を頼りに探すので、なかなか見つけられない。２回、場所を訊ね２０分もかけてたどり着く。初老の男に、ファドを聞きたくてと申し上げると、お一人か、食事をとるか、飲むだけかと聞いた後、家の中に入れてくれる。ファドを聞けるのはファド・レストランであるが、つくりは概ね同じ、まずアプローチともいうべき横長の１坪くらいの入り口空間があって、扉があって、外から内部を覗くことは出来ない。旅本によれば、ファドレストランは９時開演、１１時頃から本格的歌手（ファディスタ）の登場、１２時を過ぎて真打ち登場、夜中の２時頃までと案内されている。店の中は若い一組の東洋系のお客しかいない。壁際で、先のもう一組が見えない席に案内された。まだ人々が集まってくる時間にならないのだと一人合点する。ポルト・ドライを注文。小太りのおばさんウェイトレス、メニュー上の 3000 エスクード・ミニマムと示されたあたりを指差し、いいか、いいかと念を押す。「ｲｴｽ!OK!」と申し上げると、ナッツの皿盛とちっちゃなビスケットの皿盛、ポルト・ドライ一杯を持ってきた。ギターのＢＧＭが流れていたが、しばらくすると光量がぐっと落とされ、ＢＧＭはフェイド・アウト。老いた二人のギタリスト、ヴィオーラとギターラを伴って女性ファディスタが登場する。ちょっと声がかすれたおばはん。これも旅本によるが、ファドとは「ラテン語の運命(fatum)に由来し、実らぬ恋の哀しみ、人生の苦しみ、海に出たまま戻らぬ肉親への想いなど、運命に翻弄される人間の心を歌ったものが多く、その憂愁と哀惜に満ちた歌声は、どこか日本の演歌に通じるものがある」が、それほど哀愁は伝わってこない。３曲、１０分位のステージ。私ばかりを見て歌う。もう一組いるのだから、公平に顔を向けた方がいいよと、いらぬ心配。二杯目のポルト・ドライを注文。その後、お客が入ってきた様子もない。時計を見れば２４時、そろそろ佳境の入り口となるはず。男のファディスタが先ほどのヴィオーラとギターラを伴って登場。かなりの声量。また私の方ばかり見て歌う。やはり３曲、１０分で終了。拍手をしても呼応する拍手がない。ポルト・スウィートを注文。男ファディスタ、私に手を振って、帰ってしまう。ギタリストのおじさん達、肩をおとして、私の方など見もしないで帰ってしまう。民衆に愛されているポルトガルの伝統歌謡･･･。旅本の解説からかけ離れた有様で、もうファド自体に人気がないのだろうか、この店がダメなのか、この店は、この業界は、早晩潰れるに違いないと想いを巡らす。これ以上ここに留まるのは店に迷惑というもの、そろそろ帰った方がよかろう。なにか期待や予想を著しく裏切られ、妙な気分である。「Senhora ! Quante ？」お皿の上の計算書、3000 ｴｽｸｰﾄﾞ。

, ŒÉŽ“ ú ƒWƒ ‡Z• ƒEƒ }ƒ Š• A• ƒEƒ ƒtƒ ƒHƒ ƒ ƒZƒ J• ƒ ƒ C• [ƒ V

目覚めは７時。さらに２時間半眠り、あわてて身繕いして、１０時半までの朝食に間に合う。初老のウェイターが、なれた仕草で、客の食べた後をかたつける。お皿やカップ、ナイフやフォーク、スプーンが重ねられるのだが音を立てない。そして、次の客のためにカップやお皿、スプーン、フォークを整える作業を黙々とやっている。いそがず、あわてず、その存在をまるで気づかせないような働きぶりで、ハ・ハー、いいじゃないと思う。ヨーグルト、ハム２枚、クロワッサン１個、オレンジジュース２杯、コーヒー２杯、水１杯、たばこ２本の感動の朝食。

ワイン醸造所 Jose Maria da Fonseca(ｼﾞｮｾ･ﾏﾘｱ･ﾌｫﾝｾｶ)を今日の目的地に決め、１２時、タクシーを頼み、行き先のメモを運転手に見せる。Estacao Terreiro do Paco(ｴｽﾀｻ･ﾃﾚｲﾛ･ﾄﾞ･ﾊﾟｿ：パソ駅)。「港に行ってどうするのか」「テージョ川を渡ってカシーリアスに行きたい」と告げる。

１０分で港に着く。運転手、止まっている連絡船を指し示し、「あの船だ。ここで降りな」と

教えてくれる。「オブリガート」。連絡船乗り場には、白も黒も黄色も、中国系、アジア系、アラブ系、様々な人種が集まってきて乗り込む。この国が人種の坩堝であることが一目にしてわかる。日本人は･･･私だけ？２０分ほどで対岸に着く。旅本をざっと読むと、フォンセカはリスボア近郊 Azeitao(ｱｾﾞｲﾀｵﾝ)ある。近郊であるから川を越えアシリーアスに着けば、もう後数キロと考えておかしくない。リスボアにはうじゃうじゃいるタクシーが、まるで集まってこない。私の前の一組の家族が乗って、私のタクシーが来るまで小一時間、夏の暑い陽ざしの中で、汗を噴き出させながら待った。行き先を言っったらあまりの近さに乗車拒否されそうな不吉な予感。やっと乗り込んだタクシー、若い運転手に行き先メモを見せると、そんな所は知らない言う。ここで降ろされてしまったら、ホテルを出てよりの２時間が、全く無意味なものになってしまうから、かなり焦る。旅本のフォンセカのページを出して見せると、日本語に混じっての幾つかのポルトガル語の中に、彼は知っている地名を見つけたらしい。「わかった。そこなら知っている。そこなら行ける。ｏｋ！ OK ！」かれはにっこり笑って走り始めた。私は近郊というから、２～３キロの辺りと思っているのだが、なんと高速道路に乗り３０分、途中で本当に行けるのかと問えば、フランソア並の「I'm sure!」ときたもんだ。タクシーは内陸に深く入って、料金メーターは確実に数字を増していく。どんどん不安になるが、まだ４万ｴｽ

ｸｰﾄﾞは持っている。１万５千ｴｽｸｰﾄﾞ位まで走らせてもいいだろう。行き着く所まで行って、決着を付けるしかないと考える。そこにフォンセカがなければ、そのままタクシーで帰ってくればよいのである。運転手の青年、道路上の Azeitao の表示を示し、「大丈夫だかんね!! もう少しだよ」とおっしゃる。その後１０分も走っただろうか、前方の小高い丘を指して、「あそこがそうだ」と教えてくれる。その丘には葡萄畑が見え、こんな遠くの近郊だったのかと納得するとともに、旅本は、もっとロケーションを詳しく書いておくべきだと腹を立てる。小さな村の中に入って、運転手君、ガソリンスタンドのおじさんに、フォンセカの場所を聞くと「今曲がってきた角を逆に行けばすぐそこだよ」と教えられ、それから１分もかからず到着。建物の壁にはフォンセカと大書きされている。「さあ、着きましたよ、お客さん。4250 ｴｽｸｰﾄﾞ」と誇らしげに告げる。チップも含めて 4500 ｴｽｸｰﾄﾞを払う。「オブリガート」「オブリガート、バイバイ!!」。

　さて、これまた旅本によれば、ポルトゲス、フランセ、あるいはイングレを話す可愛いお姉さんが案内をしてくれるはずであるが、フォンセカの正門と思われるものは固く閉じられている。脇の入り口を探すが、いずれも固く閉ざされ、中をうかがうこともできず工場の周りには、関係者と見える人影すらない。どういうことかと思案の末、旅本を出す。営業：月～金と小さ

な字で書いてあるではないか。今日は土曜日。「オーマイ・ゴッド！ガッテム！サン・オヴ・ア・ビッチ！ファック・ミー！」旅本に当たるが、どうしようもない。３時間余、5000ｴｽｸｰﾄﾞ以上を使ってのこの始末に茫然自失。タクシーで引き返すしかないと探すが、田舎の村、居るはずもない。かと言って、途方に暮れ、そこに立ちすくんでいても解決にはならない。この憎き旅本によればミニ・ロールがおいしいという角の CASA das TORTAS で腹をつくろうと決めそちらに向かい歩き始めると、道ばたの教会の鐘が鳴り、結婚式を終えたカップルが祝いに集まった人達に囲まれ、祝福され、花びらが舞い歓声が上がり、花嫁とキッス、お母さんとキッスの場。お幸せにの気持ち。その賑わいを通り過ぎ、CASA にはいる。昼食時なのか店内はこれも大変なにぎわいで席はない。うまく伝わるだろうかとおずおずと、ビアを注文する。ちゃんとグラス一杯のビールを注いでくれた。タクシー代で小額紙幣を使ってしまって、１万ｴｽｸｰﾄﾞ札を出すと、黒人系の少女は、ちょっと困ったようで、同僚を呼んで、両替し、お釣りをくれた。一杯１３０ｴｽｸｰﾄﾞ、たっぷりのお釣りである。外のパラソルの下に座り、ゴク、グーッと一息で飲む。地獄で仏とはこのことだろう、うまいと叫びたくなる。さらに一杯を注文。たばこをくゆらせ、これからの対処を考え、旅本を慎重に読み解きながら、時間をかけて、ゆっくり飲む。バスがある。この発見と２杯のビールは、腹だけでなく、心も落ち着かせ、まあ、明日の夜までにホテルに帰れれば、それでよいのだという気分にさせた。隣の席のおばさんが、ケーキとエスプレッソで楽しんでいる。目も胃も欲しくがって注文。うわさのミニロールとエスプレッソの昼下がりの喫茶店、いたく満足。

CASA から３００メーターほどくだった所に、時刻表が有るのでもなく、路線地図があるのでもなく、ただ道の両側に対に赤くさびたトタン囲いとベンチがあるから、バス停らしいと思われる代物がある。青年が腰掛けている。カシーリアス行きのバス停はここかと訊ねると、道の反対側だと教えてくれる。次のバスは何時かと訊ねると、知らないという。いずれ来るのだからと反対側のバス停に鞄をおいて、待っていると、青年もこちら側に渡ってきて、バスが来たと合図してくれた。青年に続いて同じ扉から乗り込もうとすると、前から乗れと指示する。彼はパスか、回数券をもっているらしく、一元の客は前から乗車ということらしい。ワン・マンカーでカシーリアスまでと告げて、ありったけのコインを運転手に渡すが、足りないらしい。500 ｴｽｸｰﾄﾞ札を出すと、先に渡したコインに加えて 30 エスクードお釣りをくれた。

運転席の近くのポルトゲス達が、その成り行きを面白そうに見ていたが、何も言わなかった。道路は舗装道路でガタゴト走ったのではないが、田舎のバスはおんぼろ車、･･･ガタゴト走る･･･懐かしのメロディーが聞こえてきそうな気分である。カシーリアスのタクシー乗り場での不吉な予感は様々に変化して的中したが、私の人生が変わってしまうような大失敗ではなく、笑い話がまた一つ増えただけで、これはこれで良いのだと思う。

リスボア、パソの港に帰ってきたのは午後５時近く、バイジャの街をうろついて、ロッシオ広場からタクシーでホテルに帰ることに決め、アウグスタ通りをロッシオ広場に向かって歩いていくと、サンタジョスタ通りの交差点で、昨日のバトン・ガールの演技をする大道芸人の兄さんにまた遭ってしまった。嫌な想いが残っているから、避けて通ろうとすると、彼はめざとく私を見つけ、ニヤニヤしながら近づいてきた。そして、「俺は、君を憶えている。昨日ちょっと意地悪をして、悪かった。からかっただけだ。悪気があったわけではないから許せ。ごめん。今日は、楽しく話でもしようじゃないか」と誘ってくる。一瞬ひるみ、関わるまいと逃げるような気持ちになったのだが、一人きりの寂しさと、好奇心が、まあいいさ、なりゆきにまかせようという気にさせた。彼は、昨日の償いをするつもりか、バトンの芸をしてみせるが、あまりうまくない。投げあげたバトンをはずしてしまったり、とにかく、芸の中断が多い。申し訳程度に４拍の拍手をしてやる。彼は、私の気持ちを見透かし、芸を止め、ビールを飲もうと誘う。路傍の CASA で、サグレス２本を 500 ｴｽｸｰﾄﾞで買い、彼におごる。昨日座ったパラソルの下に座ろうとすると、「ここはおっさんやおばはんしかいなくて、つまらない。もっと、かわいい娘の近くへ座って、娘達を眺めながら飲もう」と大胆な提案。しかし、残念ながら、可愛い娘達の近くには席がなく、道路の端の商店のウィンドウの前に座り、可愛い娘達の通り過ぎるのを眺めながら飲むことにした。

彼は「ルイーシ」と名乗って、私に漢字でその名前を書けと言う。「留居志」と書くと、日本にもそういう名前が有るのかと聞く。そんな名前はないから、当て字だというとつまらなそうな顔をした。「大道芸で君は一日幾ら稼げるのだ」と聞くと、「今は 1000 から 2000 ｴｽｸｰﾄﾞ。しかし、バトンの先に火を付けてやると 5000 ｴｽｸｰﾄﾞ位は稼げる。でも、指先に怪我をしているからそれができない。」と手のひら

を広げ、怪我している指先を見せ、先ほどの芸がうまくできなかった言い訳をする。大した傷ではないから、彼の芸は大したものではないなと私は思う。「本当の仕事は絵描きなんだ。でも、絵描きでは稼げないから、この大道芸で補っているのだ。」とも言う。「絵描きなのか!!。そうか、私の息子は、絵の学校に行っている。」「その息子は何歳なんだ」「２１歳、多分その位だ」「俺にだって、子供はいる。６歳の女の子。俺は３０歳。出身は、テージョ川の向こう岸の漁村で、親父は漁師をしている。」「･･･!!今日、向こう岸へ行って来たよ。フォンセカのワイン工場に。でも、休みで、何も見れずに帰ってきた。」「向こう岸へ行って来たか、良いところだったろう。俺の村は、そことは違う、川のそばで、いいところだ。･･･休みだったか･･･ﾊﾊ･･･俺は毎日が休みさ･･･自由人ﾀﾞ･･･」「･･･それも悪くないな･･･」「写真撮らせろよ」「ダメだ」「どうして？」「嫌いなんだ。だからダメ」自己紹介の連続なのだから話はとりとめがない。一緒に一世風靡的大道芸をしていたイヤリングを耳やら鼻やら唇やらにいっぱい付け、黒のタンクトップに膝の上までの黒パンツ、腰には大きな金属バックルの幅広ベルト、髪は白金色、化粧は超現代風の娘と、同様なコスチューム、やはりイヤリングに鋲のいっぱい着いた黒皮のベストの大柄な青年がルイーシに声をかけて、ビールを買いに行く。ドイツ人だと彼はいう。電子カメラを取り出して、ルイーシに見せてやる。興味を示せば、シャッターチャンスが出てくるはずだ。彼は、面白がって、あちこちにカメラを向け、例のドイツ人の娘がビールの大瓶を下げて帰ってくると、呼び止めて、カメラを見せる。彼女も面白がって、使い方を教えろと言う。教えてやると、当然、撮りたがる。被写体は結局私と道端で物乞いをしているお婆さんで、お婆さんにお金を渡せと言い、私もお婆さんに並んで、帽子を差しだし物乞いのポーズ。彼女はけらけら笑って撮影。お婆さんにその映像を見せると、今度はお婆さん、もう一枚撮れと手を差し出すが、もう一枚は止めた。ドイツ娘はあちこちにカメラを向けて遊んでいたが、しばらくすると飽きて、バイバイと言って、サンタ・ジョスタ通りに消えた。この間にドイツ娘の写真を隠し撮りで１枚ゲットしたが、結局ピンぼけだった。そろそろルイーシと別れ、ホテルへ帰ろうかと思い始めた頃、彼はまた話し始める。「俺は、ポルトガルの娘とよその国の娘とだいたい見分けが着く。おおよそ何処の国かもわかる。あれはポルトガルで、あれはイングレで、･･･今、通ったのはジャーマン･･･。ポルトギースはうきうき、リズミカルに歩く。それ以外の国の娘はそうではない。特にジャーマンはギスギスした感が強いから嫌いだ。ポルトギースは、お金はないけど、人生を浮き浮き、楽しく生きようとしているのサ。」と、肩を振って楽しい人生を表現する。そして、かれは、「あれはイングレ」「あれはポルトギース」と通過する女性をあて、その女性に何かを話しかける。答えが返ってくると「そらねポルトギースだったろう」「イングレだったろう」と誇らしげである。かれは彼女たちに「今何時」とポルトガル語や英語で聞くのである。「君は賢いね･･」と誉めると、「言葉が通じたから国がわかったのではない、直感で分かるのだ」と私が誤解していると主張した。東南アジアが通る。彼はチャイニーズだという。私はコーリアだという。「いや、チャイニーズだ。この辺りには多く住んでいるから、チャイニーズだ」という。私にはどちらとも判別はつけられないのだから、彼が言うとおりでよいが、でも、どうしてジャポネと思わないのか。「･･･!!どうしてジャパネと

思わないのか･･･」「･･････直感さ･･･」私でも日本人ではないとわかる。「ジャポネは目が違うんだよ。目つきが、ジャポネの目は優しい。でも、･･･」「なるほど、ジャポネの目は、垂れ下がっていて、チャイニーズの目は、つりあがっているということか。」「･･まあそうだ、そう思わないか。」「･････」彼は、知り合いが通ると必ず声をかける。そして、「あれはこの辺りでは有名な絵描きだ、あれは友達のドイツ人だ」と教えてくれ、相手には「今出来たばかりの日本人の親友だ」と私を紹介した。「ハシシを吸ったことがあるか」「ない」「吸いたいか」「･･･いらない･・・」すこしやばいなりゆきになる。これ以上関わると御用とかの状況に陥りかねないし、それに自己紹介の延長の会話にも飽きてきて、ホテルに帰りたくなった。それでも彼等の芸をちゃんと見たくて、カメラに収めたくて、その旨、彼に告げると、彼は仲間の所に行きなにか話し、「今夜９時にここに来れば、あの芸が見られるから･･･」と教えてくれた。９時の再会か、危うい約束だなと思いながら、「これたら来るよ」と返事をする。彼は、私がこれからワインを買って帰ると言うと、１９８０年ｳﾞｨﾝﾃｰｼﾞのポルトとポルトガル産のワインの買い物まで付き合い、私との巡り会いの想い出にとっておく、絶対これは使わないからと日本の通貨千円札を私からゲットした。私の夏休みの一人旅に、可笑しく楽しい一時をくれたのだから使ってしまおうが使うまいが、どちらでも良いと思う。麻薬を吸っているかもしれない危険な友達、やばいな、と思うと共に、それでも一緒に地球の上で生きているというような感じ、もっと彼の事を知っておきたいというような思いが、名残惜しいような、別れがたい心模様にさせた。

ホテルに帰り着いたのは７時近く。覚悟を決めて、出発前に看護婦さんから教えられたやりかたでお風呂に半月ぶりに浸かった。バスタブの底には、垢が薄く残った。今夜はア・セヴァーラでのファド攻略、夕べの敵討ち作戦を立てる。ここも駄目ならファドは死んだと考えるべきだ。夕食はア・セヴァーラの近くのパッパ・ソルダ（Pap'　Acorda)[高級レストランながらカジュアルな感じ。各種の魚料理が充実している。おすすめは刺身のマリネ Carpaccio.]に決める。しかし、ルイーシとの約束の９時を組み入れると後の進行がうまくいかない。昨日意地悪されたのだし、約束を破っても、あいこということで、許されるだろう。身勝手な言い訳で、ルイーシとの約束はなかったことにしようと決め、鋭気を養うためにベッド・イン、１時間眠る。８時半を回って、目覚めると、彼との約束が気になり始め、一度は止めると決めた再会のためにバイジャへタクシーで向かった。

約束の５分前に約束の場所についたが、土曜日の夜のバイジャは、閑散として、風が舞い、寂しいだけでなく、犯罪の臭いすら感じられる。ルイーシ一団の影もなく、彼等はこれでは来ないなと思う。たばこを吸いながら、約束の時間まではここで待った。大柄の、それでいて風体は落ちぶれた黒人系の男が、左右にぶれながらよれよれと近寄ってきて、何か話しかけてくる。「･･･シガレット･･･。」たばこをくれろとでも言っているのだろう。ルイーシもそうだったし、数年前に行ったシアトルの朝の散歩でもそうだった。ルンペンしている白人や黒人が寄ってきてはたばこをせがむ。恐怖心もあって、そんな時、条件反射的にたばこを差し出してしまう。かれは、たばこを受け取ったが、吸おうとしないで、黒い手の平を広げ、厚さ５ ㎜、幅３ ㎝、長さ５ ㎝　程の焦げ茶色の塊を見せ、「１０万ｴｽｸｰﾄﾞ、モロッコ産で、お前の吸っているシガレットより、ずっと効く。」と売りにかかる。これがルイーシの言ったハシシなのだろう。「ﾉｰ、ノーサンキュウ!!」男は他の買いそうな客を捜し、よれよれと歩き始める。約束の時間の１０分後までルイーシを待つつもりが、１分たりともいたくないという心模様にさせ、

パッパ・ソルダに向かうことにした。アウグスタ通りからロッシオ広場に出るまで、数回約束の場所を振り返ったが、ルイーシの影はなかった。この閑散とした街の状態は、彼等の商売が成り立つはずもなく、今夜の興業は当然止めになり、彼は、それでも約束だから･･･なんて頑張ってはみたものの･･･、私が、私の都合で約束を破ろうとしたように･･･彼も彼の都合で破っただけ･･･ああ･･･どうでもよいことだ･･･。

リスボアの街にはいくつもの丘があり、登ったり、下ったりの連続で、目的地を地図上で見る限り、距離でも、方角でも簡単に行けそうなのであるが、歩いてみるとこれが大変で、３倍くらいのエネルギーを必要とする。バイロ・アルトのはずれパッパ・ソルダへの路は、バイジャの街より更に暗く、閑散としていて、通りによっては人影がまるでない。薄明かりの下の３人組の若者が、ハシシを買わないかと誘う。バイロ・アルトの街に入っているはずなのだが、自分の立つ位置がつかめず、恐怖心だけが膨らんで、彷徨うのをやめ、結局はロッシオ広場に戻って、タクシーに乗り、パッパ・ソルダのある通り：Rua da Atalaia まで連れていってもらった。500 ｴｽｸｰﾄﾞもかからない距離で、運転手は行き先を示したとき、ムッとした反応であったが、通りの口で止まり、この先だと教えてくれた。旅本の地図を頼りに、多少の人の群はある通りの中程まで登ると、それらしきレストランがあり、店名を読むが、とても Papa A'sorda とは読めない。通りすがりの買い物用ワゴン（乳母車の改造車）を押したおばさんに、「ｾﾆｮﾘｰﾀ!! オンデ・パッパ・ソルダ？」と訊ねると、その場で看板を見上げ、「パッパ・ソルダ!!ここだよ」と笑う。旅本には右側にその位置が示されているのだが、実は左側であった。この旅本はかなりいい加減だなと、また腹を立てる。入り口は薄暗く、店内もそれほど明るくはない。満席である。「予約してないがどうだろう」とギャルソンに訊ねると、「この店は全て予約制になっているから、気の毒だがだめだ」と丁寧に断られ、心を残しながら、夕食を諦め、再度、旅本を頼りに、近くにあるはずのア・セヴァーリャ攻略に向かった。どうも一度迷い始めると、気分は怖じ気づいて、迷いの連続になってしまう。街角で東洋系の二人連れの娘に自分の居る場所と、ア・セヴァーリャの場所を訊ねようとする。「日本人ですか？」「ノー!!」強い響き。「･･････」気持ちが萎えているから、情けないことに後が続かず、身も心もオロオロという体である。その哀れな様子を見かねたのか、娘達はやさしく私の居る場所、カモンエス広場:Largo do Camoes であること、ア・セヴァーリャの場所を教えてくれた。「あなたの持っている地図は小さくて、いくつも通りがあるのに載っていない。ここから５分くらい丘の上に歩くとサン・ロッケという有名な教会がある。その近くよ。」実際は違ったのであるが、サン・ロッケ教会は記憶の中の場所だから、これで何とかなると、心が少しだけ落ち着いた。「オブリガート!！サン・キュー!!」「････」迷いに迷って、ア・セヴァーリャにたどり着くも、なんと、ここも満席、予約無しではダメとなり、明晩の予約を入れ、今日はなんとついていない日だったことかと情けない気持ちでセヴァーリャを退散する。サン・ロッケ教会に戻り、夕食の気持ちなのだが、萎えた気持ちは、店選びでも優柔不断にさせる。フロアーの高さは同じなのだが、斜面に並んでいるので、下側の店にはあがって店に入り、上側は店に降りていくという２軒並びのレストラン。下の店は照度が高く、東京にも良くある、一枚ガラスの窓で外からも中からも足のつま先から頭のてっぺんまで見える露出型で、ピザとかスパゲッティとかが得意そうな若向きレストラン。若干の空席。上方は、ウィンドウに、その日使うのであろう肉、魚貝がつり下げられたり、置かれているポルトガル料理店。その地の料理を選ぶのは旅人の習いと心得ているのだが、満席なのである。予約してあるかとかの面倒が店にはいるのをためらわせているので

ある。ポルトガル料理屋のフロアーの隅の二人用の席が空いたので、意を決して入り口から一歩中に踏み降りた。なかで働くギャルソン達は、私には目もくれず、忙しく働いている。しばらく待つが、状況は変わらず、このまま居たのでは、他の客に席を取られてしまいそうな気分になって、奥に進むと、やっと気づいて、「何人」と聞いてくれた。「一人」と答えると、例の空いた席を示し、「座れ」と言ってくれた。オブリガード１００万ボルトの気分。道に迷うことの連続、「予約なし!ダメ!」の連続で萎えきった心身には、他のお客のｻｰﾋﾞｽに走り回っていて、１０分以上待たなければオーダーを取ってくれなかったけれど、彼はキリストの再来のように思えた。一人での寂しい食事には違いないのだが、食べられる事の喜びのレヴェルは高い。メニューの構成はスープ、アントレ、メインの構成になっているのは何処の国も一緒である。ビール Cerveja とヴィーニョ・ブランコ Vinho Branco、スープ Sopa nao, 茸入りオムレツ Omeleta、メインは金額に合わせ何物であるかわからないものをオーダーした。１０分ほどしてビールがやっと出てくる。これだけ待てば不味いはずがない。つまみは、パンにアンチョビのパテをつけて、しかし、これに比べれば大量の発注をしているのだから食べ過ぎては行けないと食欲を戒める。次が出てくるまでに時間がかかりそうなのでﾋﾞｰﾙはグーっと半分ほどでやめる。スープが出てくるのに、また５分。展開はゆっくりゆっくりなのであるし、元気の出始めた心はもう慌てない。オムレツが出たところで、白ワイン、なんだかわからない料理は、ブイヤベースとパエリヤの中間、中位の鍋に、ムール貝、あさり、えび、蟹、白身の魚、底にお米、凄いボリュームである。これを食べきるのには、一緒に食事する相手が欲しいと思う。さらに一人では時間も持て余す。ギャルソンの兄ちゃんの似顔絵を紙ナプキンに描きながら、ゆっくり食べる。半分くらいでもう満腹になり、もうダメだ。それを見てとった兄ちゃんが、「お終いか、エスプレッソ飲むか」と聞き、「もう充分、コーヒーが欲しい」と答えるとかたつけにかかった。テーブル上の彼の似顔絵を店の中で働いている同僚に見せるからと、取り上げて「うまく描けているから呉れ。女房に見せる。」と言う。「いいとも」と答えると、大事そうに何かの間に挟んで仕舞った。おおよそ１時間半のお食事。１２時近く、タクシーでホテルに帰る。まったく計画通りには行かない一日だったけれど、幾つかのポルトギースとの触れあいがあり、さらにやっとたどりついた夕食は、それなりの充実感があり、ボー・ジュールだったと満足する。明日は何処にいこうか・・・!!!

, ‰Ž‚P, Q‘ ú • ‐‘Œ‚Ã ‚ü ‚ß‚Š ‚ó‚Ę‚ V‚ A• ‚ƒ‚ h’ ‚ü ‚ß‚Š ‚ò‚Ę‚ A‚ Z‚ ‚ @• ‚ƒ ‰‰

午前中はホテルでぐずぐず過ごす。ぐずぐずしていると、こんな生き方でよいのかと思ってしまう。しかし日本人のなにか追われるようなせわしい生き方が変なのであり、勝った、負けたの価値観がそう思わせるのだ。そのあたりで生きている限り、資本の論理とその結果に一喜一憂し、もっといろんな喜びがあるということを知らないで人生を終わってしまうのではないか。人生は勝負なのではなく、つまるところ主観的に満足できるものであるかどうかということに尽きる。人間が社会的存在である以上、すばらしい人生と自他共に認めるありようもあるのだろが、今の私の脳味噌にではこれ以上の思考は持て余す。これ以上は、考えないで、今日を過ごそうと思う。美術館に行こう、日本食を食べようと決め、旅本を調べる。ラパ Lapa にある国立古美術舘:Museu National de Arte Antiga、その近くのラーメン屋「札幌」、シアード Ciado

に戻って、シアード美術館:Museu do Ciado で今日を終わろう。

国立古美術博物館まではタクシー。札幌は赤いラーメンのれんと赤提灯が掛かっていてすぐに見つけられた。日本人の経営で何か耳寄りな日本語の情報を期待するが、主人はポルトガル人。腰が悪いらしく、腰ベルトをぎゅっと締め直して、焼きそば作りに取りかかるところで、その仕草はまことのラーメン作り。ユニホームは札幌と書かれた法被。中学３年生位の少年が注文を取りにくる。メニューには懐かしの日本文字。ビール、醤油ラーメンと餃子のセットメニューをオーダーする。セニョリータが黙々と餃子の素を作りながら、私に一瞥をくれ、その後も、時々、珍しいものをみるように私の様子を窺う。まず、サグレスがでてくる。今日も昼からビールがうまい。壁の本棚には、あだち充の「みゆき」「タッチ」が数冊、それに「極道くん」の漫画。「みゆき」を読み始める。「おやじの中学時代の成績表を見つけ、自分の限界を知らされた」という高校生が主人公。面白がって読み進むうちに餃子、旅本おすすめの通り、まことに美味しく、ラーメンへの期待が高まる。さて、そのラーメンは、スープに塩味が効きすぎているのと、どこかふやけたしまりのない麺で、おすすめできない代物であったが、ノン・ギャスの水を注文し、スープに足してやると、程良い塩味になって、スープも残さないで最後まで食べられた。「みゆき」の漫画は面白く、読みかけは残念だが、このままここで読み続けるのは、もったいないという、午前中のぐずぐずの物思いとはまったく矛盾する思いに引きずられ、あきらめ、2000 ｴｽｸｰﾄﾞほど払って店を出る。真上から太陽が照りつけ、石畳に跳ね返って、膨れた胃袋とともに、眠気を誘う。まるで慣れた街にいるような、のんびりした気分になる。

国立古美術館は、入場料を払おうとすると、日曜日は無料だからと入場券だけをくれる。絵画は、ここも宗教画、特にキリストにまつわる題材が多く、パンツをはいたキリストの絵が、エッと思わせた。画家が違うだけで、テーマが重複し、見流す感じで館内を回った。ただ、中世の貴婦人が、男の生首を皿に載せ、差し出している一枚の絵に、私の眠気はふっとんだ。若い、ふっくら顔の、笑みを含んで、それでいて強い意志を示す顔立ち、これだけなら、好みの女で済むのに、生首を差し出す残酷さとその顔立ちの魅力との間の不均衡さは、私の心をギョッと掴んで、惹きつけた。

外に出て、タクシーを捜すが見あたらず、タクシー乗り場までと歩き出す。テージョ川沿いの Av. Vinte e Quatro de Juiho をしばらくバイジャに向かって進むが、タクシー乗り場は見あたらず、市電 Electrico に乗ることに決めた。これにはドイツ製の新型車両と旧型のチンチン電車とがあり、同じ線路の上を走るから、瞬間スピードは新型の方が速いが、所要時間は変わらない。新型の方は乗車券の買い方も車内の自動販売機とややこしそうなので、運転手に１５５ｴｽｸｰﾄﾞ渡す方式のワン・マン・チンチン電車に決める。終点のコメルシオ広場 Pr. do Comercio で降り、例のアウグスタ通りをあがる。日曜日は店の多くが休みで、昼日中でも閑散としていて、ルイーシの一団はいるはずもないなと思う。毎日が休日だと言う彼にとっても、今日は子供や妻と過ごす本当の休日であろう。三つ目の交差点を左に曲がり、長い葛折になった坂道を、重い足を引き吊り登りきると、目の前は下り坂。そこにあるはずのシアード

美術館が見あたらない。下れば、また登らなければならないのだから、重い足は下りたがらない。美術館の場所を訊ねようにも、車ばかりが通って、歩行者がいない。意を決して 100m ほど下り、角を右に曲がり 50m ほど登ると、美術館の入り口。現代の絵画、彫刻。この美術館の方が私には居心地がよい。作品数は古美術館に比べれば少ないが、１時間ほど見て回り、カフェでコーラを買い、外のパラソルの下で、一休み。離れたパラソルの下で、芸術家風のおじさん二人が会話中、その横では、同様の老人が本を読んでいる。後ろのパラソルの下には、二人の娘が、お菓子と紅茶で、さらに離れたパラソルには、インテレクチュアルな女史が、お勉強。ポルトガルの上質な昼下がりの美術館の情景です。

ｼｱｰﾄﾞ美術館

シアード美術館を出て、坂を上り詰めると、見覚えのある広場に出た。昨夜、このあたりで迷い、ロシオ広場に戻り、タクシーを拾ったのだ。私より体格のよい、酔っぱらいがヌーっと寄ってきて、「俺には身寄りがない上に、ピストルで腕をやられ、働くことができない。なにがしかを恵んでくれないか」とせがむ。よほどお人好しに見えるらしい。でも、このお人好しこそが私の最高の個性なのだから、そう見込まれた以上、後には退けない。拒否することに何か後ろめたさ、罪悪を感じる私の心模様なのだ。100 ｴｽｸｰﾄﾞを恵む。男は不満げな顔。物乞いするという惨めな心模様を、勇気を振り絞り、それなりのエネルギーを使ったのであるから、100 ｴｽｸｰﾄﾞばかりなら恵むな、喜ばしておいて、一層惨めな気分になったではないか、喜びに見合う金額が与えられて当然だという不満。ぶつぶつこの男が何か呟くが、オブリガートという言葉はなかった。この金額のお恵みはポルトガルの常識以下で、馬鹿にしていることなのかもしれない。与える側と受け取る側の心模様のバランスが崩れてしまった瞬間なのだ。そんな物思いと、くたびれた足腰は、今夜のア・セヴァーラへの鋭気を養いに、ホテルへ帰るという気分。新たなターゲットに物乞いし、冷たく無視され、追い払われる男を後目に、ロッシオ広場に下り、タクシーでホテルに帰り、風呂に入った。明日の朝は、早い旅立ちである。ゆっくりファドを聴くために、バゲッジは今のうちに整え出発の準備をしておくのがベスト。ホテルのレセプションにモーニングコールを４時半に頼むと、ずいぶん早いと笑う。７時４０分の飛行機だからと言うと納得。

「セニョリータ!!コール・タクシー」と言うと、むっとした表情。いけない命令止めだった。プリーズと遅れて付け加えるが、ウェイト・ゼアーと命令形のお答え。目には目をのその態度。

夕食は、昨夜の店と決め、中を窺うが、まったく空席がない。待っていたのでは、セヴァーラの１０時予約に間に合いそうもなく、別の店に入るが、ここも満席。どうしようかと迷っていると若いウェイターが、「一人か、下のフロアーでよいか」と聞く。悪いはずがない。急いでいるのに、スープ Sopa を抜かしただけで、ビール、赤ワイン Vinho　Tinto、エントレ、メイ

ンのオーダー。まず塩味が効いた生ハムがビールとともに、次いで赤ワイン大瓶、次いでレタスの上に蒸しエビ、オリーブ添え、酸の強いドレッシング掛け、ドライな白ワインに合いそう。最後に昨夜同様、中位の鍋に、鱈、サーモン、ジャガイモのごった煮。似たような料理が二日続きで、これは失敗、後悔の部類。料理の出てくるスピードとその量を考えれば、ポルトガルでの食事には十二分の時間を用意しなければならない。結局、ワインも飲み残し、料理も食べきれず、エスプレッソはキャンセル。不味かったからではない、時間がないだけだとの言い訳もできず、代金を払い、セヴァーリャに向かう。予約を受けつけた門番のおじさんが、笑顔で迎えてくれ、予約帖を確認し、「飲むだけか、それとも食事もするか」と聞く。セヴァーリャのパンフレットには昼間レストラン営業と書いてあったが、夕食については何も書かれていなかった。食もあるのか、ちゃんと書いておけよ。中途半端に夕食して、無駄をしてしまった悔しさで、不満の気分。ファドを聞ける場所はパンフレットに記載がなくても概ね食事ができる、食事しながら聞くところということなのだろう。一昨夜のリスボア・ノイテとは違い、店内はかなりの賑わい。奥の隅の二人用の席に案内される。日本人と思われる青年が一人で同様の席にいて、脇を通る時に軽く会釈、「今晩は」と言うと戸惑った感じながら会釈を返してよこした。まず、若い男のファディスタが歌う。声量も少なく、通る声でもなく、上手くはないが、人気者らしく、歌う彼の近くの席の４人のお上りさん風の中年女性にえらくうけていた。おじいさんのウェイターにドライ・ポルトを注文。二種類のつまみ。これが基本形なのだ。アコーデオンの伴奏、トライアングルのリズムでフォークダンスが間に入る。

ア・セヴェーラ内部/老ウェイター

しんみりファドで、哀愁を帯びたポルトガル演歌に浸るイメージとはずいぶんかけ離れた成り行きである。見渡せば、ご接待風の一団やら、団体旅行の一団やらと、ここはいわゆる観光名所なのだ。周りの客たちもファドを聞きに来ているのではなく、ファドをＢＧＭに、他の楽しみ、若い男女の逢い引きだったり、友達同士の雑談をしに来ている気配なのだ。人生に疲れ、慰めや安らぎを求めた人間の集まる場所ではないのだ。感興の湧かぬまま、ポルト・ドライを飲み干し、さて、もう一杯頼もうかと思ったら、老ウェイターはすかさずポルト・ドライを注ぎにきた。この老ウェイターがこの店で一番の一流だなと感心する。次いで、女性のファディスタ。体型は声量がありそうなのだが、これも期待はずれ。黒マントを羽織った中年のファディスタ、先の若い伊達男よりは数段上手い。そして、ここのメイン・ファディスタ、リーナ・サントス。それなりではあるが、盛り上がらぬ感興。あの伊達男は、リーナ・サントスのツバメとか、つまらぬ空想を続け、三杯目のポルトをグーとあおり、韓国の団体旅行の一団が隣のテーブルに座ったのを潮に帰ることにした。門番のおじさんにタクシーを頼むと、しょぼしょぼとした初老の運転手を呼んでくれた。このおじいさん、見かけによらずのスピードでホテルまで私を送ってくれた。かくしてリスボアの最後の夜も終わった。ファドは、多分、こんなところで聞いてはいけない。もしあるなら、町外れの赤提灯風

の居酒屋で聞くべきものに違いない。

,ﾊE Ž,P,Ｒ‘ ﾊ Gｆｓｆ ・ﾊｆ０

４時２０分に目覚める。前３泊が、自然にまかせていたら寝過ごし気味だったのに比べ、ちゃんと起きれるものだと感心する。モーニングコールは正確になされるかと窺っていると、きっちり４時半にテレフォンコール。５時半にチェックアウト。ランドリー代金とミニバーで、4240 ｴｽｸｰﾄﾞ。タクシーを呼んでもらい、まだ暗い街を抜け、リスボア空港には１５分ほどで着いた。タクシー代は 1500 ｴｽｸｰﾄﾞでお釣りが返ってきたから、初日のタクシーはやはりぼられたということになる。エール・フランスのチェック・カウンターがなかなか見つからず、空港職員に２度も聞いて、やっと搭乗手続きが終わった。受付の青年は、親切な奴で、リスボアーパリ－成田までの手配をしてくれ、「ナガサキサン(ここまで日本語で)、パリはトランジットですが、すべての手続きは済ませてありますから、パリで再度搭乗手続きをしなくてよいですよ。パリ－成田の飛行機の出発までは２時間近くありますから、買い物でも楽しんでください。」と割引券までくれた。「持ち込みの荷物は幾つですか」と聞かれ、あらかじめカウンターの横のベルトコンベアーに置いたバゲッジを彼が、彼の横に引き寄せたので、「一個」というと、「一個キリ」と驚く。赤い機内持ち込みのタッグを、私の鞄につけ、「搭乗手続きは終了です。よい旅を!!」「オブリガート」

なぜか、バゲッジの受付チケットをくれないが、リスボンではこれが普通なのだろうと、勝手に判断し、出発ロビーへ向かう。フランスで入国審査があったけれど、以後はＥＵ加盟国内は審査なしで入国できるし、出国といっても、航空券を見せるだけ、ずいぶん簡単になったものだ。出発ロビーは早朝につき、さすがに人数は少ない。残ったｴｽｸｰﾄﾞをここで、おみやげでも買って使い切ろうと思ったが、残念ながら店が開かない。ＣＡＳＡで生ハムサンドとエスプレッソの朝食。ポルトガル人はよくたばこを吸うからか、空港内も禁煙ではない。どこでもたばこが吸える良い空港である。

飛行機はテージョ川を川上に向かって高度を上げていく。朝日がリスボアの街を金色に輝かせる。上空から見るとリスボア近くのテージョ川は、川というより湾に近く、どのくらいの距離かわからないが、離陸から５分も経過すると急激に川幅は狭まり、２０分もすると、その上流は、雲間から光を受けて、金色の帯となって流れている。

シャルル・ド・ゴール空港でのトランジットは、リスボアの空港で教えられたとおり何もしなかった。残っていた７５０フランを使い尽くすだけだ。チーズ各種二箱、フォア・グラ一瓶。２５３フランが残るが、ロダンのウサギ 262 ﾌﾗﾝを見つけ、有り金全部とＶＩＳＡカードを渡し、ミックスでよいかと黒人の女店員さんに精算を頼む。彼女はレジで、しばらく考えた末、「たった９フランよ。どこかにあるんじゃないの。捜しなさいよ。」と言う。ありったけのコインを手のひらに載せて、二人で調べるが、ｴｽｸｰﾄﾞしかない。ないと判ると、彼女は、私のＶＩＳＡカードを返してよこした。「サインするから、精算用紙を呉れないか」「 いいわよ。私が払っておくことにしたの。次に来たときに払ってくれれば!!」やるねー!!粋だねー!!お負けしとくﾜ!と言われれば、これで一件落着。私の心には、メルシーの気持ちだけで、このことをすぐ忘れてしまう。この成り行きだと、次に来たときに、私は、きっとこのことを思い出し、借りを返そうとするだろう。借りを返しにフランスへ来ようとするだろう。

エピローグ

成田に帰ってきたのは１４日午前８時。バゲッジ・クレームで預けた荷物を待つが、とうと

う出てこなかった。リスボア空港での、確認ミスの結果である。撮影したフィルムと、書き付けたメモをのぞいては、惜しいと思うものは少なかったし、カメラなどは保険で取り繕えると思ったら、それほど心はパニクにならなかった。エール・フランスの空港職員は、たまにある事で、荷物は出てくるから心配しないこと、成り行きから考えて、きっとリスボンにあること、捜しだして送ること、私が確かにリスボンから乗っていることも搭乗券をチェックして確認が済んだこと、バゲッジの形状や中身、開け方を教えなければならないこと、鍵を彼に預けること、それから通関する時に、中をチェックするから、了解することなどを説明し、書類にサインで、最後のトラブルの処理が終わり、２週間近い長い旅行が終わった。外国の人々にとっては、２週間ばかりの旅でしかない。ビジネスでないかぎり１月以上は楽しむようだ。お国柄の違いと言うことだろうか。無論、できるなら、そんな旅が良いと思う。

どうして海外に旅したいのかと考えてみると、青春の名残みたいなものではないかと思う。私は、小田実の「なんでもみてやろう」にあこがれていて、日本を飛び出して地球の上を彷徨ってみたいという夢があった。ずーっとそんな欲求が、私の中に眠っていて、多少は余裕が出てきたこの頃、目覚めて、あてのない旅に出るようになった。

一人で、全く知らない国に行き、そこの人々と同じ空気を吸い、一握りの人々にすぎないけれど、表面的ではあるが、束の間ふれあったりして、日本人であるという属性の他は何もなく、言葉もうまく通じないが、それでもちゃんとやれるじゃないかと実感したりする。自分が小心で、臆病で、ちっぽけで、優柔不断で、成り行きまかせのいい加減なことも見えてきたりするが、そんな自分でもいいじゃないかと思う。また、昔笹川良一が、「世界は一つ、人類は皆兄弟」とＴＶコマーシャルしていたが、本当に世界は一つと実感できているのか、しているのか、どこで人類皆兄弟を実感できたのか、できるのか、行ってやってみなければわからない。なにをするにしても、この実感が生きているというモメントではないか、この実感が面白いと思う。

同時代人である沢木耕太郎の青春時代の一人旅の「深夜特急」を読んで、ポルトガルへ行こうと決めた。持ち合わせたのは「オブリガート」「セニョール」「セニョリータ」「クアント」「オンデ」のポルトガル語、わずかの英語、当座のお金はあるという気持ちと、なんとかなるだろうという楽観だけだ。やったことは、ここに書いた事だけで、旅慣れた人から見れば大したことはまるでないのだろうが、私の心はリスボアでの数日に楽しい旅であったと満足し納得しているのです。そして、この次はもっとポルトガルと日本は一つ、ポルトガル人と日本人とが兄弟を実感できるような、ポルトガル行きを計画しようなどと思っているのです。

ƒ ×ƒ Œ“ ¡ Ì ‰º Ê H ¡ É ` ¡ © ê ½ Ž ¡ «